

【会員だより】

場所に名前を付ける

岩井 淳治

平成24年4月、思いもよらぬ異動で行政職から研究職となり、瞬く間に4年間の過ぎ、研究所勤務5年目を迎えることとなった。研究職になったのはよいが、林木育種研究担当者2名の退職後にポツンと来たという状態であったため、最初の1~2年間はなにがなにやらさっぱり分からず、大変困惑していたことを思い出す。特に、何がどこに植栽されているかを把握するために、過去の資料を見たり、前任者に度々メールで確認したりと大変時間を費やしていた。それというのも、構内の育種素材群は配置図があるだけで、看板も杭もなく、林班等で管理していないために場所を言い表すことが大変難しい状態であったためである。

たとえばあるスギを正確に言い表すのに、「苗畑と広葉樹見本園の境目に植栽されているスギ7本のうち道路側の4本」などと言いつつしか方法がなく、やりとりに大変手間取っていたのである。特にクロマツの系統配置は複雑で、これを完全に把握するのに1年近くかかってしまった。

構内にはクロマツの植栽箇所が大きく分けて5箇所あり、各系統がいろいろな場所に植栽されているが、ある場所の呼び方に「苗畑の奥」、「試験林」、「ため池前」などと複数の表現があり、呼び方が一定しなかった。現場で指示する分には「あっちのクロマツ」などと指させばよいが、いつもそのようにはいかず、今後の系統のコンタミ防止のためにもなんとか地名のようなものを付けなければと考えると、4年前からクロマツ4箇所については「イ・ロ・ハ・ニ」としてみた。他に「梅の木前」という名前の付いている場所もあるため、全部で5箇所となる。

さて、場所に名前を付けないと前述のように言い回しが面倒になるためなのだが、どんな名前でもなにかしら由縁があり、今回のように機械的に付けた「イロハニ」という名前ではどうもピンと来ないし、味気ない。また、数字の「2」と「ニ」を混同するおそれもあるため、名称再検討を余儀なくされている。

現在最も地名らしい「梅の木前」というクロマツの場所は、実際に梅の木の太木3本の前にありイメージ

しやすく、もう変えようがないほど浸透しているため、今後「イロハニ」もなにか特徴的なピッタリな名前をつけて管理していきたいと思っている。

(いわいじゅんじ、新潟県森林研究所)



図-1 職場構内のクロマツ植栽地「ハ」で台木の調査中

林木育種と科学と技術

武津 英太郎

先日、九州大学の白石先生の最終公演を拝聴し、林木育種について改めて考える機会を頂いた。その中で「林木育種は科学と技術の二つの側面があり、それぞれに適した人間は異なるので両方育てなければ」というお話があった。これをきっかけに少し考えてみたい。

科学（自然科学）と技術について、市川淳信著「科学が進化する5つの条件」（岩波書店）に簡潔にまとめられている。科学とは「自然を言語世界に写す」ことであり、科学研究とは「モデル形成とその検証のループを回す」活動となる。技術とは「言語世界を実存世界に写す」ことによりヒトの生得的な能力を延長する道具を作る活動であり、科学を基盤にすることにより効果的となる。これを林木育種にあてはめてみると、まず林木育種とは樹木を人間に好ましい性質に改良する活動であり、様々な技術により実現される。例えば私が主に対象としている選抜技術は大きく見ると遺伝統計学の科学モデルを背景にした技術である。表現型や育種価評価のような個々の技術について他の生物種での開発技術の導入や、より種特異的な技術開発が行われる。現行の科学モデルに基づいた技術では非効率な場合、新たな科学研究によりモデルを更新し、それを元に技術改良を行う。しかし種特異的な科学研究を行った場合、生物種は無数に存在することから、それに合わせたモデルも無数に存在しうることになる。生物における科学研究が価値を持つためには、それが種特異的であればあるほど、人間の営みに必要な技術開発への貢献をより強く意識する必要がある。この点において林木育種で科学は技術から不可分であると私は思う。一方で技術開発ではいわゆる銅鉄実験*となってしまうこともあるが、それ

が技術の実用化のためのベースとなり得るのであれば、林木育種の目的・目標の達成に役立つという観点で意味をなす。

ここで、林木育種の目的とそのための目標（対象形質、改良量、対象環境等）の設定はどうかというと、科学や技術だけでは解決できない。どの社会ニーズに対応すべきか、どの場所で何をどれだけの改良を目指すのか、将来まで見据えた判断・決断は容易ではない。しかし、目的・目標が間違っていれば技術開発も科学研究も意味をなさない。

就職してから10年以上たち、材形成の科学的理解への貢献を目指しながら、現在の私の課題は統計的手法による選抜の効率化技術の開発・導入や基盤データベース構築等、技術的色合いが強い。科学と技術の両者を見据えながら、それ以前に林木育種の目的と目標を常に考えながらそれに貢献できる研究を目指したいと思う。

* 元来は、銅を材料に、すでに結果が発表されている研究を、材料を鉄に変えて追試する実験の意。そこから転じ、結果は約束されているが独創性や新奇性に乏しい研究のこと。

（ふかつえいたろう、森林総合研究所林木育種センター九州育種場）